

会 議 録

附属機関又は 会議体の名称		第5回豊島区国際アート・カルチャー都市懇話会
事務局(担当課)		文化商工部文化デザイン課国際アート・カルチャー都市推進 グループ
開催日時		平成29年11月2日(木) 午後1時00分～午後2時30分
開催場所		議場(本庁舎8階)
議 題		(1)東アジア文化都市の国内候補都市決定を受けて (2)国際アート・カルチャー都市の推進について (3)豊島区アフター・ザ・シアターの検討について
公開の 可否	会 議	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 非公開 <input type="checkbox"/> 一部非公開 非公開・一部非公開の場合は、その理由
	会 議 録	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 非公開 <input type="checkbox"/> 一部非公開 非公開・一部非公開の場合は、その理由
出席者	委 員	近藤委員(会長)、隈特別顧問、里中特別顧問、野村特別顧問、太下委員(副会長)市村委員、鈴木委員、高萩委員、中村委員、萩原委員、前田委員、青木委員、猪狩委員、木下委員、小林委員、知久委員、原委員
	区 側 出 席 者	区長、副区長、政策経営部長、危機管理監、環境清掃部長、保健福祉部長、健康担当部長、池袋保健所長、子ども家庭部長、都市整備部長、地域まちづくり担当部長、土木担当部長、会計管理室長、教育部長、企画課長、広報課長、東アジア文化都市推進担当課長

事務局	国際アート・カルチャー都市推進担当部長、国際アート・カルチャー都市推進担当課長
-----	---

審 議 経 過

No.1

[開会]

会 長：第5回豊島区国際アート・カルチャー都市懇話会を開会する。

[区長挨拶]

1. 議事

- (1) 東アジア文化都市の国内候補都市決定を受けて
- (2) 国際アート・カルチャー都市の推進について
- (3) 豊島区アフター・ザ・シアターの検討について

[事務局：懇話会資料5-1 東アジア文化都市の国内候補都市決定を受けて、懇話会資料5-2 国際アート・カルチャー都市の推進について、懇話会資料5-3 豊島区アフター・ザ・シアターの検討について説明]

2. 意見発言

会 長：ご意見、ご感想等をお願いしたい。

委員A：以前より観劇後の余韻を楽しむ場があると良いと思っていた。東アジア文化都市2019では、国際交流の場に子どもたちを参画させてほしい。私たち大人だけではなく、子どもたちにも体験をしてもらい、自信を持って国際交流ができるような国際人になれる機会を作っていただきたい。全面的にさまざまな形で協力していきたい。

委員B：バリアフリーの観点が抜けていると感じる。障がいのある方たちが歩きやすく、また、動きやすい場所を作っていくことは大事である。これは、お年寄りや子どもたちが動きやすい場所にもつながる。まち全体でも取り組みたいと思う。特に駅構内と駅から出た場所を中心に動きやすさを考えていきたい。アフター・ザ・シアターの取組みは、チェーン店が増えてしまわないかが少し心配である。池袋ならではのお店を大事にする仕組みづくりを考えていただきたい。

委員C：パラリンピックの水泳選手が立教大学で練習するために、豊島区に引っ越してきていると聞いている。そういう方たちが住みやすいまちは非常に重要であり、拠点になることでユニバーサルデザインとしての発信にもなる。パラリンピック選手の練習風景を子どもたちに見せることで、チャレンジ精神やいろいろな人間

形成にも影響を与えられると考えている。様々なステークホルダーが連携しながら、国際アート・カルチャー都市を進めていけると良い。

委員D：古典芸能が新しくアニメ（ワンピースという作品）とコラボしたことで、たくさんの若いお客様が演舞場にお越しになった。東アジア文化都市における事業の柱として掲げられているマンガ・アニメと舞台芸術とともに、古典芸能も参画していきたい。日本舞踊協会は、今年のラ・フォル・ジュルネのプログラムに初めて参加させていただき、舞踊と長唄を披露した。外国のお客様だけでなく、クラシックしか聞いたことがないようなお客様の「一度観てみよう」という姿勢を強く感じた。ラ・フォル・ジュルネが豊島区で開催される際には、ぜひ日本舞踊も参加したい。

委員E：東アジア文化都市の国内候補都市決定については、区長を筆頭とした事務局の努力に感謝している。この国際アート・カルチャー都市構想の中でアフター・ザ・シアターを考えたことも、とても良い発想である。しかし、もう一度、安全・安心のまちについて立ち返って考える必要がある。治安について、十数年前から地域の皆さんと商店街、行政、警察とともに区長が一生懸命取り組んでいたことをよく覚えている。今は、現在のことに追われ過ぎていて、もともと原点にあった安全・安心のまちのことを少し皆さんがお忘れになっていると感じている。もう一度、私たちの足元を固め直したい。

委員F：いろいろな演劇やオペラの鑑賞後、日本には銀座の歌舞伎座以外には余韻を楽しむ場というのがないように思う。オペラを観た後、ワインを飲みたい時などに、安全・安心な場所で、お年寄りも一緒に行くことができ楽しめるような場所はとても少ないと思う。さまざまな舞台や芸術に触れた後に、いろいろな楽しみ方ができるととても充実する。また、安全にタクシーを拾える場所を計画の中に入れていくとともに、今まで芸術に触れることができなかつた方々を呼び込む仕組みを区として作っていただきたい。

委員G：2019年に東アジア文化都市、そして2020年に東京オリンピック・パラリンピックが行われるが、国際アート・カルチャー都市を発信できる良い時期がきた。特命大使との連携を強化することを、とてもうれしく思っている。来年の試行として、一人一人の大使とのヒアリングを提案する。既に、特命大使の方々が持つ情報自体がレガシーである。区は、その情報をストックし、それを活かすことについて考えていければ良い。

委員H：東アジア文化都市の国内候補都市決定を受け、一層発信力を強化していかなければならない。発信力については、1,319名の特命大使が会社や近所の方とのふれあいの中で国際アート・カルチャーの話をするすることで、人から人へと伝わり浸透されていく。豊島区全体で推進していくためには、約28万の区民の方々一人一人にこの構想を伝えていくことが必要である。また、きれいな建物は注目されるが、既存の公共施設や公衆トイレが今以上にもっときれいで清潔に保たれるこ

とで、安全・安心にもつながると考えている。今後の取り組みに期待したい。

委員I：さまざまな能力や魅力を持っている特命大使がたくさんいる。その方々とともに、駅から離れている地域も含めて豊島区全体に興味を持っていただけるような、安全・安心なまちづくりに取り組めると素晴らしい。

委員J：アートとカルチャーを軸にしてこれだけのことを進めている地域は、都内を見ても他にはないと改めて強く感じている。広報の内容や見せ方がとても見やすくわかりやすい。ポップで若い方にも手に取りやすいように工夫されている。文化的なイベントがたくさん開催されているが、まちの中でその情報が目に見えて出ていないと感じる。それらを顕在化させていくことで、楽しいまちができていくと思う。アフター・ザ・シアターの取組みは、これからの豊島区、東京や日本を創っていく世代の人たちがチャレンジできるような場を作ることが念頭に置いて進めていただきたい。

委員K：総務省のマイナンバーカード推進事業の一つとして、マイキープラットフォームという、お店の紹介などの情報が出るサイトがある。アフター・ザ・シアターでは、このシステムを活用し、繁華街から離れたところでも朝まで営業しているお店や商店街などの情報を発信し、外国人観光客にもご案内できるようになれば良いと考えている。

委員L：東アジア文化都市については発信することも重要だが、韓国や中国を知ることも非常に重要である。情報の取り方によっては、韓国や中国は全く違ったイメージになる。

委員M：先日の東アジア文化都市の報告会で概要を説明させていただいたが、会場は満席で区民の方々の熱意をダイレクトに感じた。東アジア文化都市における最大の課題は、住民の方の認知と参画である。いわゆる打ち上げ花火的な文化事業はお金をかければできるが、今まで地域一帯の盛り上がりはなかなか演出できていない。豊島区には国際アート・カルチャー特命大使が1,319名おり、開催前からある意味クリアしている。そういう意味では、東アジア文化都市という、国と都市が共催する事業の成熟した姿を見せることができると考えている。今後、国際アート・カルチャー特命大使が文化活動そのものに参画するステージに入るとは、大変素晴らしいと思う。ただし、区が単純に公募し、大使がアイデアを出して、補助金を出すだけでは進まない。行政は、区民の皆さんの思いやアイデアに寄り添いながら、お金だけではなく、ノウハウや場の提供など側面から支えることが大事である。その際には文化を支援するための専門家や専門組織が行政の中に必要となってくる。ぜひ文化を支援する専門家や専門組織としてアーツカウンシルをいち早く立ち上げ、オリンピック後も確実にレガシーとして継続して行っていくことを期待する。

委員N：安全・安心は根幹であり、地域の協力を得ながら皆で進めていかなければならない。今後グローバル化がより一層進むほど、安心なまちが大変貴重となる。世界

のモデルになるようなまちとして発展してほしい。アフター・ザ・シアターの取組みについては、ゆとりのある中高年の方が楽しむだけの内容になってしまうと少し寂しい。気持ちにゆとりがなく仕事と家庭しかない子育て中の方にも、アート・カルチャーに親しんでもらうことが基本の理念だと思う。しかし、実際には子どもを置いて演劇や音楽を楽しむことはできない。企業と連携しながら、区内各所で子どもを預けられる場を作ることができると、このまちの特色となる。安心してアートに親しみ、余韻を楽しめる気持ちのゆとりがあると、子育てにもゆとりを持てる。安心して子どもを産み育てられることも大事だが、大人が気持ちのゆとりを持ってこそ初めて子どもたちも伸び伸びと育つと思う。

委員O：都市の現代化が進むと均質化していく恐れがある。海外では広場に彩りを与えるため、広場にある花屋の家賃が優遇される仕組みがある。商業にも若い人やまちを元気にしてくれる人が参入しやすいような仕掛けを上手に作る必要がある。あるいは、若者向けのシェアハウスのような、豊島区ならではの面白いライフスタイルを楽しめるようなものを誘導し、その多様性を保持することが大切である。

委員P：伝統芸能はそれぞれのジャンルで子どもたちへの体験事業などの活動を一生懸命行っているが、一見盛んなように見えて衰退の一途をたどっている。東アジア文化都市の三つの柱の中に伝統芸能がしっかりと位置づけられていることを本当にありがたく思う。

会 長：皆さんの意見を踏まえ、3点にまとめる。第1点目として、これから日本が一番最初にやるべきことは、文化芸術が持ついろいろな力を人々の心の中や社会に浸透させることである。そのためには、良いセンスとスピード感を持って物事を進めていくことが必要である。これは、行政は必ずしも得意ではないが、それを実行している豊島区は本当にすごい。第2点目は、区が持つ文化の力を永続的なレガシーとするためには、やはり人が中心になるべきである。特命大使が「発信・参加」することから「参画」することへシフトすることは、地域全体で盛り上げるためにも必要である。第3点目としては、インフラも大事である。特にアフター・ザ・シアターの取組みは夜ということから、安全・安心の観点からいろいろと気をつけなければならない。子どもからお年寄りまでが、観劇後にゆとりを持って余韻を楽しむためには、いろいろなインフラがなければならない。これは日本全体の課題でもあるが、帰りのバスや地下鉄、タクシーがないと安心してくつろぐことができない。また、2020年の国際都市にふさわしいトイレやバリアフリーをはじめ、食習慣や宗教にも配慮されたインフラもあればさらに充実していく。人と場、インフラが上手く噛み合うことで文化が日常生活に根づいていく。

事務局：それではこれより、懇話会委員の委嘱式を行う。

[委嘱式]

[区長挨拶]

[事務局：事務連絡を説明]

会 長：それでは、以上をもって、第5回豊島区国際アート・カルチャー都市懇話会を終了とする。

[終了]

提出された資料等	懇話会資料5-1 東アジア文化都市の国内候補都市決定を受けて 懇話会資料5-2 国際アート・カルチャー都市の推進について 懇話会資料5-3 豊島区アフター・ザ・シアターの検討について
----------	---